

観峰館 令和四年度 春季平常展

顔真卿の書に学ぶ —館蔵法帖名品選—

会期：二〇二二年四月十六日（土）～六月十二日（日）

会場：本館四階展示室

ごあいさつ

がんしんけい

顔真卿（七〇九～七八五）は、盛唐期（七一二～七六五）に活躍した政治家です。

あんし

たいこう

安史の乱（七五五～七六三）において反乱軍をおさえて大功を挙げたことで有名で、

ちゅうぎしん

国家に対する忠義心の厚い人物として、中国史に名を残しています。

しよせい

おうぎし

また、書の歴史においては、書聖と称される王羲之（三〇三？～三六一？）とは異

なる書風を確立した人物として取り上げられます。顔真卿の書は特に宋時代（九六〇

～一二七九）以降に高く評価され、手本として学ばれるものになっていきました。

本展では、顔真卿の書を学ぶために制作された「法帖」ほうじょうを特集します。石碑に刻

された楷書体や、手紙の草稿として書かれた行書体など、顔真卿の素朴で力強い書風

をお楽しみください。

序章

顔真卿以前

―書聖・王羲之と初唐の三大家―

本章では、顔真卿が学んだ書聖・王羲之（三〇三？～三六一？）の書と、初唐の三大家と呼ばれる欧陽詢（五五七～六四一）／虞世南（五五八～六三八）／褚遂良（五九六～六五八）の書をご紹介します。

王羲之の書は中国書法史の最上位に位置付けられていますが、その真筆は現在一点たりとも残っていないとされています。後世の人々は、搨摹本（敷き写したもの）や臨書本（見て写したもの）、あるいはそれらの拓本という複製を通して、王羲之の書を学びました。王羲之の書がまだ存在していた唐時代、これらの複製を作ることに「初唐の三大家」も関わっています。ここでは、彼らの代表作を通して、顔真卿が学んだ書について概観してみたいと思います。

1 王羲之（三〇三？～三六一？）

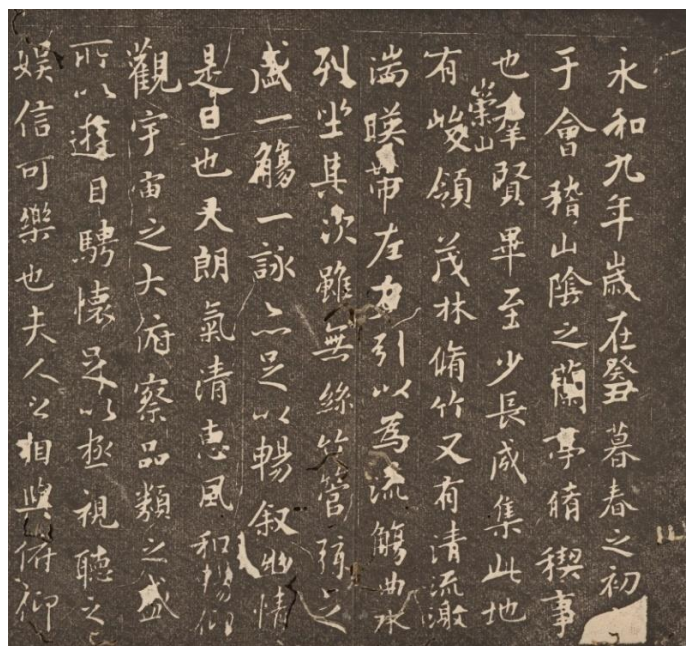
《蘭亭序》 原本…東晋時代 永和九年（三五三）



蘭亭（浙江省紹興市）で宴が行われたとき、集まった人々が詩を詠み、詩集を作りました。この詩集の序文として書かれたものが《蘭亭序》です。酒に酔いながら書いた草稿（下書き）を持ち帰り、後日清書しましたが、宴の時に書いたものを越えることが出来なかったと言われています。

2 王羲之（三〇三？～三六一？）

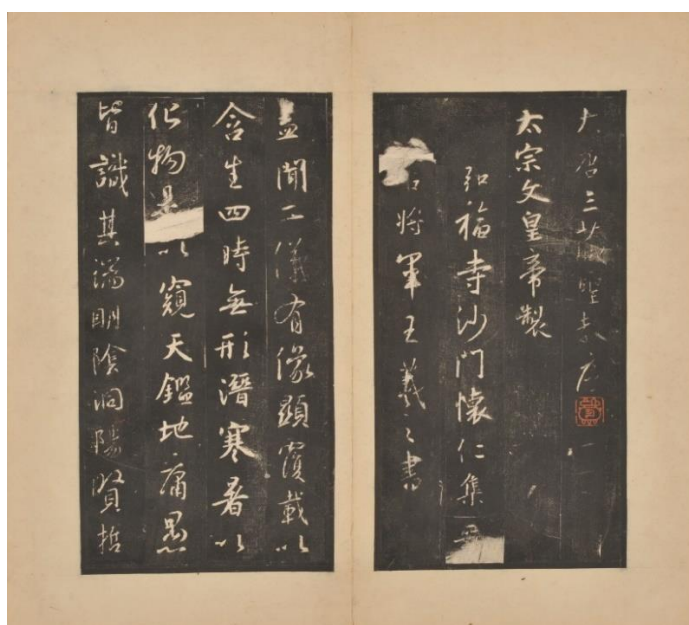
《蘭亭序》（定武本） 原本…東晉時代 永和九年（三五三）



書聖・王羲之の代表作である《蘭亭序》は、唐の太宗（五九八～六四九）が亡くなった際に副葬されたと言われます。それ以降、書を学ぶ人々は拓本などを通して《蘭亭序》を学んできました。本作は「定武本」と呼ばれる、初唐の書家・歐陽詢（五五七～六四一）が臨書したものを元に作られた複製です。

3 王羲之（三〇三？～三六一？）

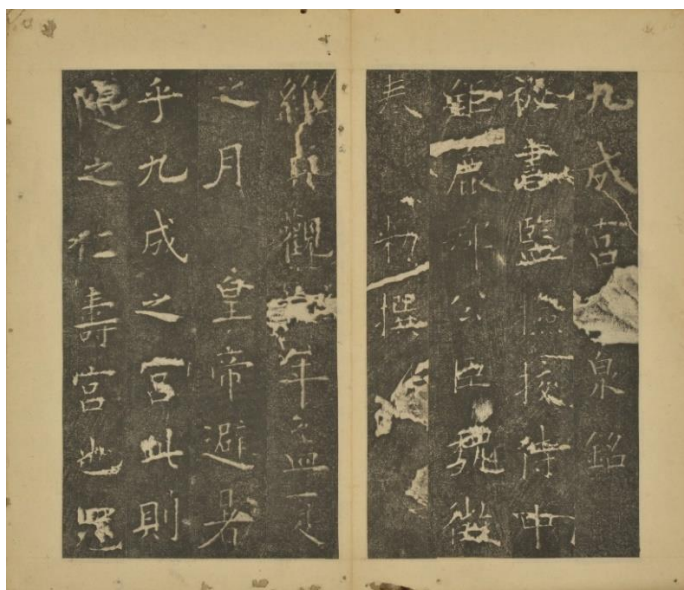
《集王聖教序》 唐時代 咸亨三年（六七二）刻



唐時代の僧・懷仁（生卒年不詳）が、王羲之の文字を集め、文章にあわせて並べ直して刻した石碑が《集王聖教序》です。集字であるため、文字同士の筆脈は通っておらず、一部には偏と旁を組み合わせて作字された文字とも言われますが、王羲之の行書を学ぶ古典として現代でも用いられる作品です。

4 欧陽詢（五五七～六四二）

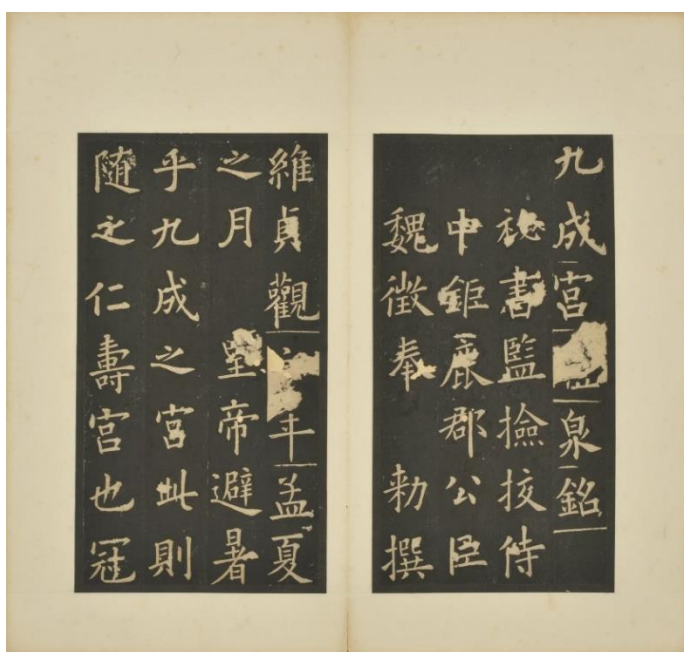
《九成宮醴泉銘》 唐時代 貞觀六年（六三二）刻



唐の太宗（五九八～六四九）は貞觀五年（六三二）、隋が建てた仁壽宮を修復し、「九成宮」と名を改めました。翌年、暑さを避けて九成宮を訪れたとき、宮殿の傍らに「醴泉」つまり甘味のある水の泉がわき出たといわれています。それを記念して建てられた石碑が《九成宮醴泉銘》です。

5 欧陽詢（五五七～六四二）

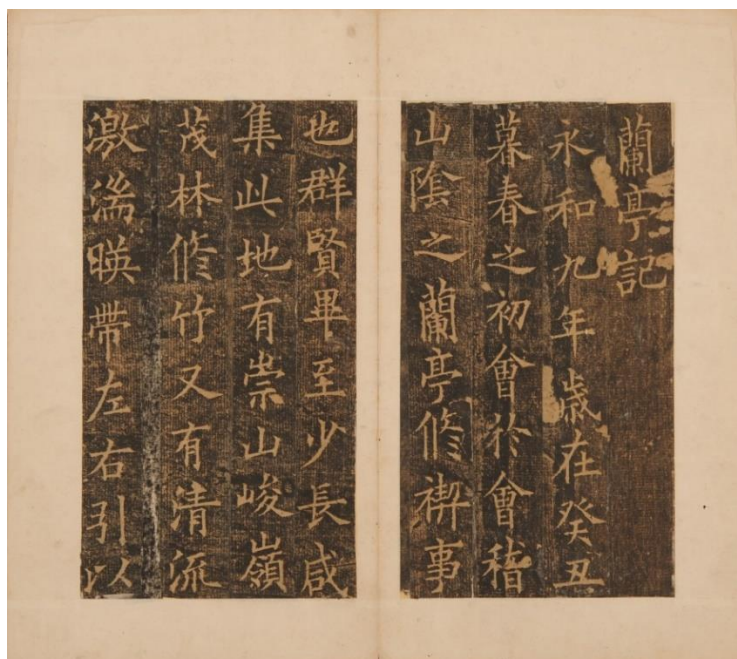
《九成宮醴泉銘》（秦氏本） 唐時代 貞觀六年（六三二）刻



《九成宮醴泉銘》は初唐の三大家に数えられる書家・欧陽詢によって書かれました。その文字は楷書体の古典として今も学ばれ続けています。また、書の手本として用いられたため、多くの模刻本が作られました。本作は清時代に無錫（江蘇省）の秦氏によって模刻された「秦氏本」だと思われます。

6 欧陽詢（五五七～六四一）

《蘭亭記》 原本…唐時代 貞觀二年（六二八）



欧陽詢が《蘭亭序》の文章を楷書体で書いたとされる作品です。細身で鋭い線は欧陽詢の《九成宮醴泉銘》や《皇甫誕碑》などと共通しています。本作は、欧陽詢の書法を学ぶための手本として用いられてきたものです。

7 虞世南（五五八～六三八）

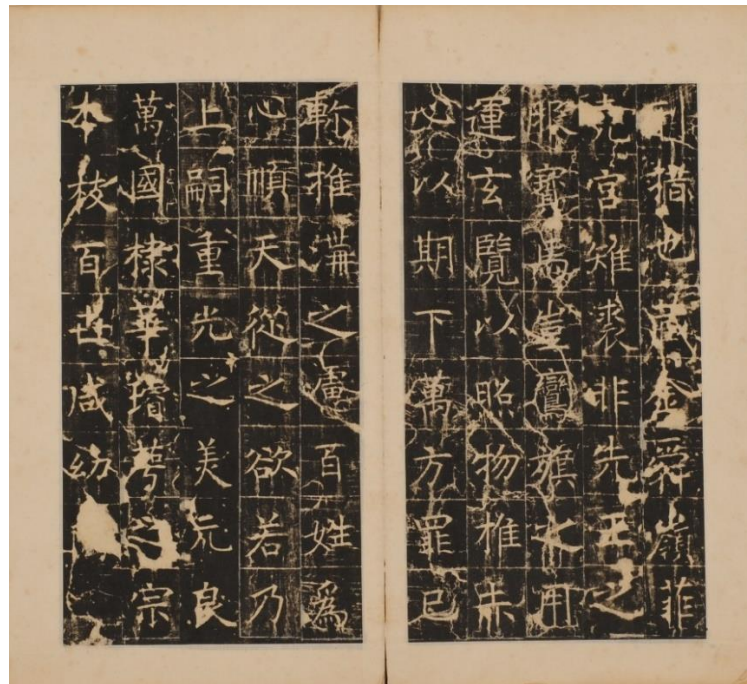
《孔子廟堂碑》 唐時代 貞觀三年（六二九）頃刻



唐の太宗（五九八～六四九）が長安の国子監（現代における大学のような教育機関）内に孔子廟を改築し、その完成を記念して建てられた石碑です。筆者の虞世南は、欧陽詢（五五七～六四一）／褚遂良（五九六～六五八）とともに初唐の三大家の一人に数えられる書家です。

8 伝 虞世南（五五八～六三八）

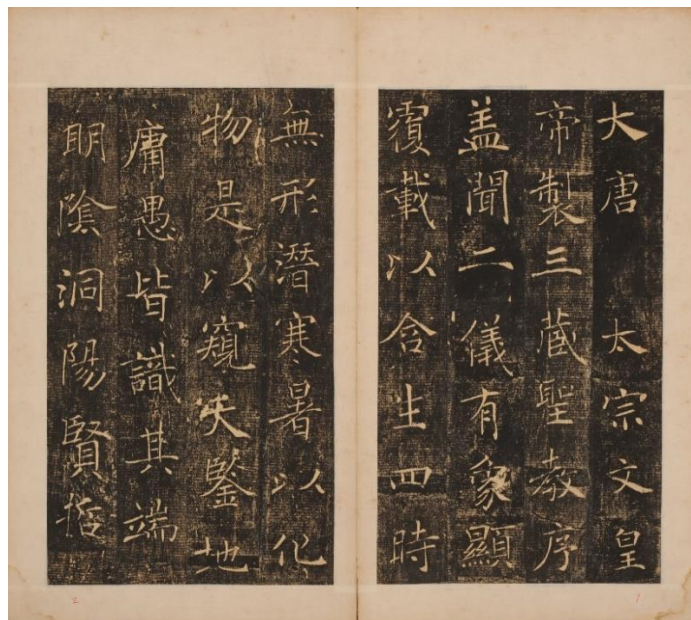
《昭仁碑》 唐時代 貞觀四年（六三〇）頃 刻



《昭仁碑》は、唐の太宗（五九八～六四九）が戦没者の冥福のために建てた石碑です。古くから虞世南が筆者であると伝えられますが、確証はありません。他にも、唐の王知敬（生卒年不詳）や欧陽通（？～六九一）を筆者とする説があります。

9 褚遂良（五九六～六五八）

《雁塔聖教序》 唐時代 永徽三年（六五二）刻



玄奘三蔵（六〇二～六六四）がインドより大量の經典を持ち帰り、これらを漢語に翻訳した功績に対して、唐の太宗（五九八～六四九）とその子・高宗（六二八～六八三）が文を寄せ、建てられた石碑が《雁塔聖教序》です。本文は初唐の三大家の一人・褚遂良が書いており、彼の代表作でもあります。

第一章

若書きの楷書碑

―《多宝塔碑》と《東方朔画賛碑》―

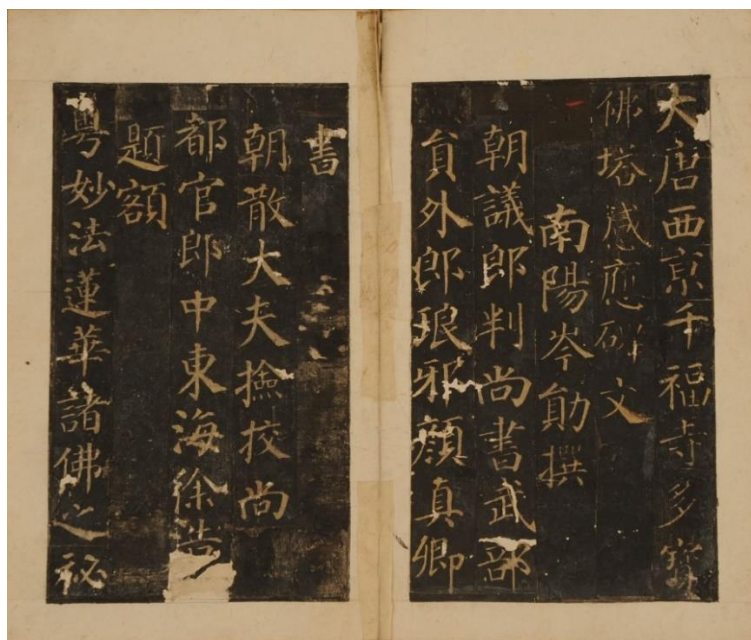
本章では、現存する顔真卿の作品中、若書きに位置付けられる《多宝塔碑》と《東方朔画賛碑》をご紹介します。

顔真卿の作品で、現在確認できる最も早期のものは開元二年（七四一）の《王琳墓誌》です。次いで、天宝八年（七四九）の《郭虚己墓誌銘》があります。これらはいずれも近年になって発見されたものです。《王琳墓誌》と《郭虚己墓誌銘》が発見されるまでは、顔真卿の若書きといえば《多宝塔碑》が代表的な作例でした。それに次ぐものとして《東方朔画賛碑》があります。これらの碑を法帖にしたものが観峰館の収蔵品にも含まれています。

若書きから円熟味を増していく過程をご覧ください。

10 顔真卿（七〇九～七八五）

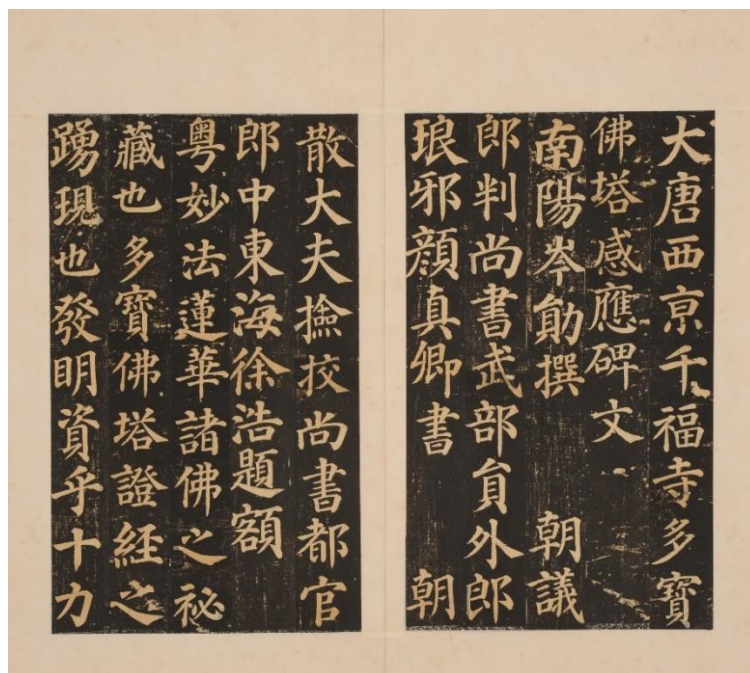
《多宝塔碑》 唐時代 天宝十一年（七五二）



唐時代の高僧・楚金（六九八～七五九）の徳行と、千福寺の境内に多宝塔を建立した功績を述べたものです。石碑は、現在、西安碑林博物館に安置されています。《顔氏家廟碑》のような晩年の楷書作品に比べて、《多宝塔碑》はやや細身で落ち着いた雰囲気を持つ作品です。

11 顔真卿（七〇九～七八五）

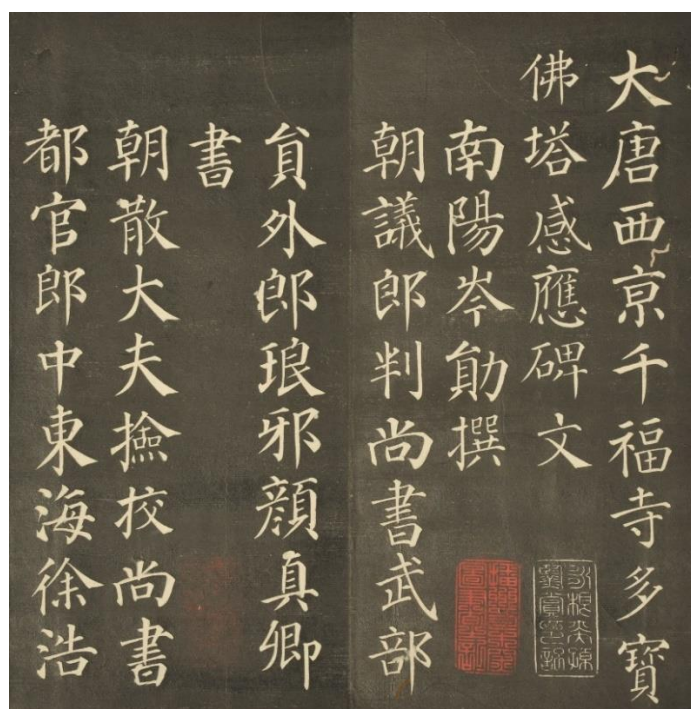
《多宝塔碑》（模刻本） 唐時代 天宝十一年（七五二）刻／模刻時期不詳



顔真卿早期の楷書作品として古くから著名であった《多宝塔碑》は、多くの複製（模刻本）が作られました。本作は刻されている文字の線が明瞭であることから、書を学ぶ際の手本として作成された模刻本と思われます。

12 顔真卿（七〇九～七八五）

《多宝塔碑》（和刻本） 唐時代 天宝十一年（七五二）刻／江戸時代後期刻



顔真卿の書は、日本の江戸時代でも手本として用いられていました。本作は江戸時代後期に出版された《多宝塔碑》です。日本で作られた模刻本Ⅱ和刻本になります。江戸時代後期の書家で、姫路藩に仕えた永根文峰（一八〇二～一八三三）による跋文がともに刻されています。

13 顔真卿（七〇九～七八五）

《東方朔画賛碑》唐時代 天宝一三年（七五四）刻



「東方朔画賛」の本文は、西晋時代の夏侯湛（二四三～二九一）が書いたものです。これを、顔真卿が平原太守として赴任した際、再建したものが《東方朔画賛碑》です。顔真卿四六歳時の作品となります。《多宝塔碑》に次ぐ作例であり、現存する顔真卿の作品では比較的に早期のものです。

14 顔真卿（七〇九～七八五）

《東方朔画賛碑》（模刻本）唐時代 天宝一三年（七五四）刻／模刻時期不詳



《東方朔画賛碑》は《多宝塔碑》よりも線が太く、顔真卿独自の書風が強く表れ出しているように見える作品です。宋時代に採られた拓本は改鑿が少なく、元・明初期の拓本ではすでに欠損が多かったと言われます。本作は線が明瞭に刻されていることから、清時代以降の模刻本と思われます。

第二章

行書の法帖

―《争坐位文稿》を中心に―

本章では、広徳二年（七六四）に書かれた抗議文の原稿「争坐位文稿」を中心に、顔真卿の行書作品についてご紹介します。

顔真卿の書は、楷書体で石碑に書かれたものが多く、これらが代表的なものとして取り上げられます。一方で、行書体で書かれた尺牘や草稿（下書き）も残されており、書を学ぶものの範となってきました。特に《争坐位文稿》に代表される草稿の書は、極めて私的な場で書かれた作品であるために、顔真卿自身の心情が表れているようです。このような飾らない書風は、特に宋時代の文人たちに好まれることとなりました。素朴で力強い行書の法帖をお楽しみください。

15 顔真卿（七〇九～七八五）

《顔魯公三表真蹟》 原本…唐時代 至徳二年（七五七）

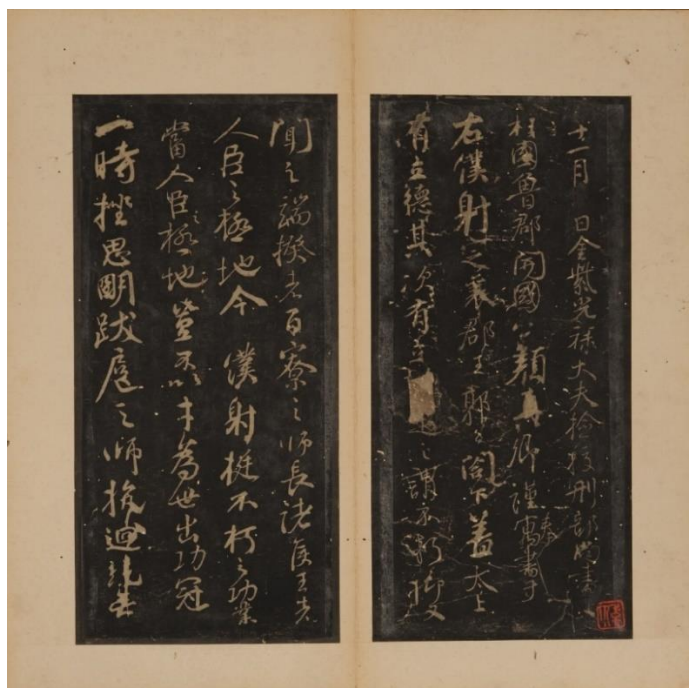


顔真卿の三種の表文「謝贈華州刺史表」「謝兼御史大夫表」「讓憲部尚書表」を刻したものです。表文とは、君主や政府に上奏する文章のことです。顔真卿四十九歳時の作品になります。

清時代に発見された墨蹟本を、丹徒（江蘇省鎮江市）の包氏が入手し、石刻にして広めたものと言われています。

16 顔真卿（七〇九～七八五）

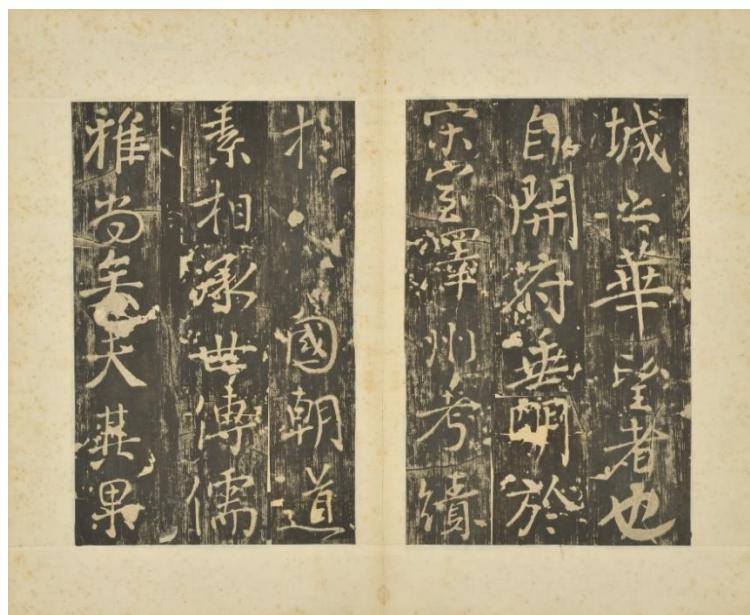
《争坐位文稿》（楊峴旧蔵本） 原本：唐時代 広徳二年（七六四）



顔真卿が郭英乂（？～七六六）に差し出した抗議文の原稿で、《争坐位帖》や《争坐位稿》とも呼ばれます。草稿（下書き）であるため、顔真卿の自然な筆法が表れているものとして、宋代の書家たちに高く評価されてきました。本作は清時代の書家・楊峴（一八一九～一八九六）旧蔵の逸品です。

17 顔真卿（七〇九～七八五）

《送劉太冲序》 原本：唐時代 大暦七年（七七二）頃



顔真卿が劉太冲（生卒年不詳）の旅立ちを送別するために記した文です。劉太冲は安史の乱に際して顔真卿に力を貸した人物でした。《顔魯公三表真蹟》や《争坐位文稿》などに比べ文字が大きく、やや書風が異なるようです。

第三章

楷書の法帖

―顔真卿五十〜六十代の諸作品―

本章では、顔真卿五十〜六十代頃に制作された楷書作品をご紹介します。この頃の顔真卿は多くの碑文を書いています。《蔵懷恪碑》や《宋璟碑》など、現在の日本では書の手本として用いられることは少ない作品も含まれています。

一方、この頃には清時代を代表する書家の一人である何紹基（一七九九〜一八七三）が好んだと言われる《麻姑仙壇記》が書かれています。当館収蔵の法帖にも、何紹基による跋文が刻されているものがあります。また、科挙の参考図書として用いられた《干祿字書》なども書かれています。これらの諸作品もまた、顔真卿の書風を様々に伝えています。顔真卿の幅広い書作をご覧ください。

18 顔真卿（七〇九〜七八五）

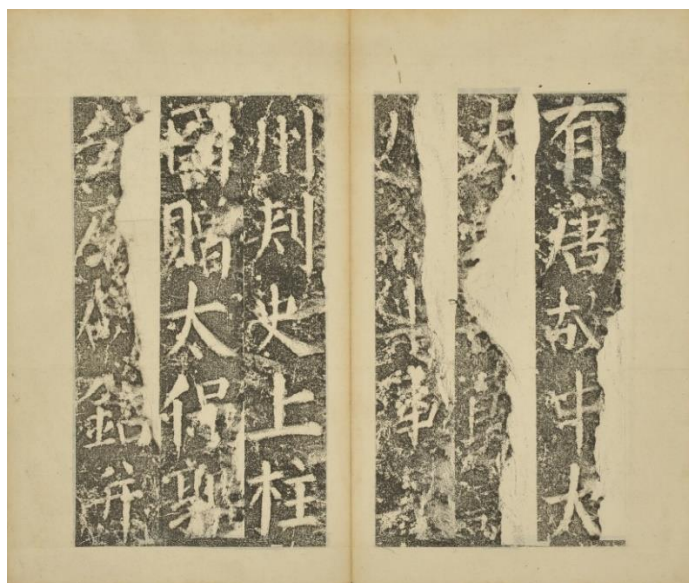
《蔵懷恪碑》 唐時代 広徳元年（七六三）刻



盛唐時代の將軍・臧懷恪（？〜七二四）の功績を称え、陝西省の蔵氏の墓上に建立されたものです。《蔵懷恪神道碑》ともいいます。石碑二行目の下部に見える李秀巖（生卒年不詳）が模刻したとの説もありますが、詳しいことは不明です。石碑は現在、西安碑林博物館に安置されています。

19 顔真卿（七〇九～七八五）

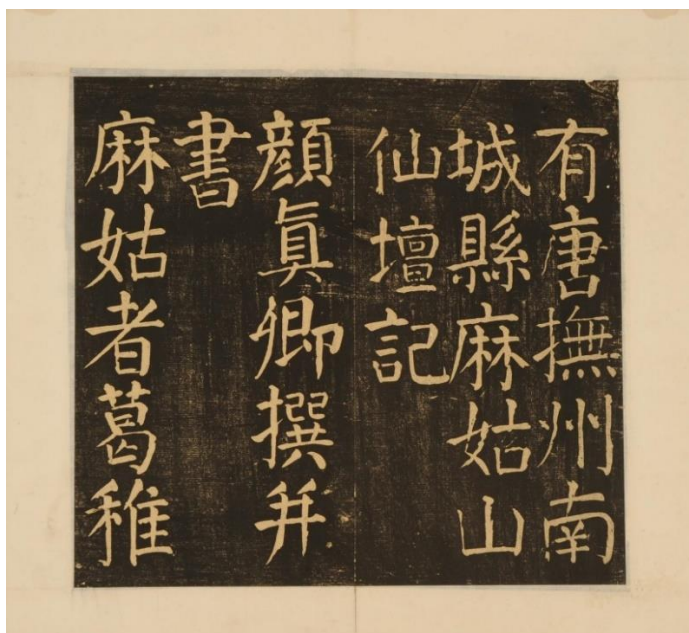
《郭氏家廟碑》 唐時代 広徳二年（七六四）刻



安史の乱を平定する際に功績のあった郭子儀（六九七～七八一）が、父・敬之（六六七～七四四）の廟に建立した碑です。選文・書ともに顔真卿五六歳時のものになります。状態の良い拓本は極めて少ないとされ、本作も欠損状態から、少なくとも清時代中期以降に採拓されたものと思われます。

20 顔真卿（七〇九～七八五）

《大字麻姑仙壇記》 唐時代 大暦六年（七七二）刻

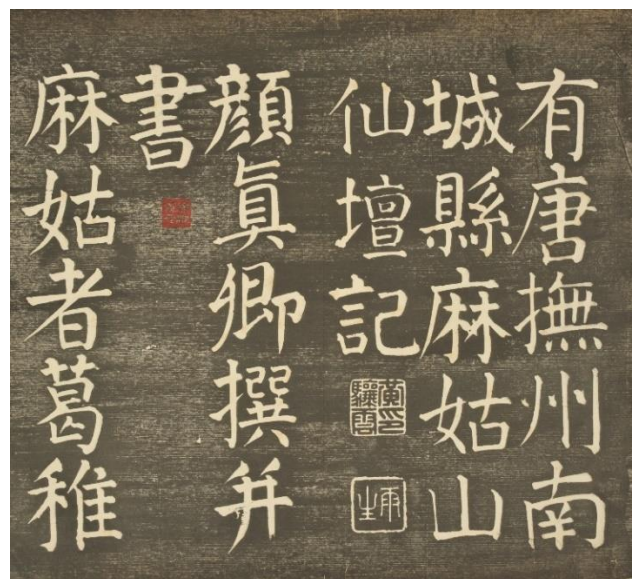


後漢時代の仙女・麻姑についての伝説と、修行の地と伝えられる麻姑山の歴史について述べたものです。顔真卿六三歳時の作品になります。顔真卿の手による《麻姑仙壇記》は大字・中字・小字の三種が存在しますが、観峰館が収蔵している《麻姑仙壇記》は大字本二点のみです。

21 顔真卿（七〇九～七八五）

《大字麻姑仙壇記》（有泰旧蔵本） 唐時代 大暦六年（七七二）刻

清時代 道光二年（一八四二）跋



後漢時代の仙女・麻姑についての伝説と、修行の地と伝えられる麻姑山の歴史について述べたものです。本作は、大字本を愛蔵した何紹基（一七九九～一八七三）が道光二年（一八四二）に書いた跋文（下段参照）がともに刻されています。清時代末期の官僚であった有泰（一八四四～一九一〇）の旧蔵品です。

何紹基による跋文（大意）

顔真卿の「麻姑仙壇記」は、世間ではわずかに小字本が伝わるのみである。その大字本は、宋時代より後に見ることがない。明時代の都穆（一四五八～一五二五）が石碑や青銅器について述べている『金薤琳琅』では、落雷によって焼失してしまったという。拓本は少ししか残っておらず、鳳凰を見るかのごとく珍しいものである。

私は昔、この宋時代の拓本を蘇州で手に入れた。これはまさしく王士禎（一六三四～一七二一）と王澐（一六六八～一七三九？）が見たという拓本だろう。長い期間、あらゆるところを流転した拓本だった。それは光り輝いているようであり、また素朴で厚みがある書だ。顔真卿が書いた石碑の中でも、まさに頂点に位置するものである。

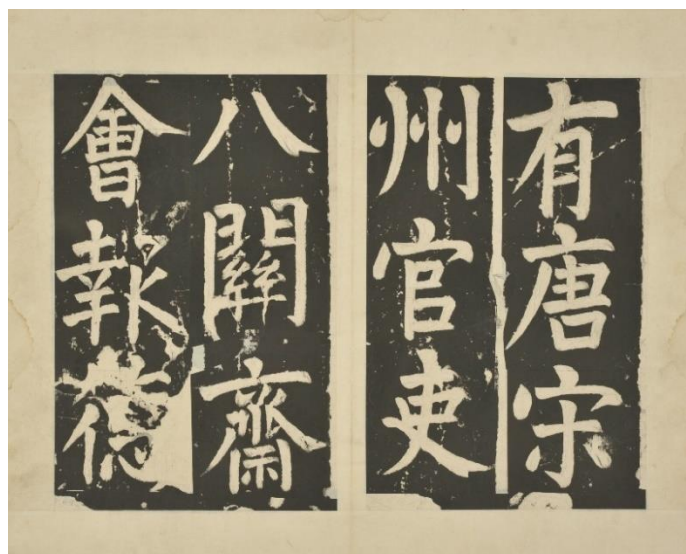
黄雨生はこの帖を一目見て、素晴らしいものだと思った。黄雨生は息子の瀛石に命じて、これを石に刻させた。瀛石は年少時より顔真卿の書をよく学んでおり、私と同じような志を持った人物であった。

黄雨生と瀛石の親子は、この「麻姑仙壇記」を数カ月で刻し終えた。これを基にして、多くの素晴らしい拓本が作られたのである。

このことを喜び記しておく。道光二年（一八四二）秋、道州（現在の湖南省永州市一帯）の何紹基が謹んで跋を書く。

22 顔真卿（七〇九～七八五）

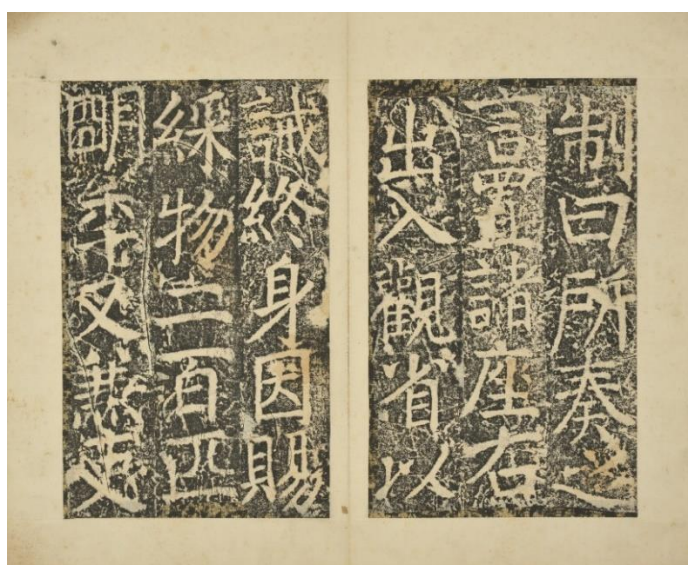
《八関斎会報徳記》 唐時代 大暦七年（七七二）刻



顔真卿は、安史の乱で功績をあげた武将・田神功（？～七七四）の病氣平癒を祈念するため「八関斎会」という仏教儀式を行いました。本作はそのことを記したもので、もとは八角の石幢に刻されていました。その後に取り起きた廃仏運動により石幢が倒され、文化大革命の際に遂に破壊されてしまったようです。

23 顔真卿（七〇九～七八五）

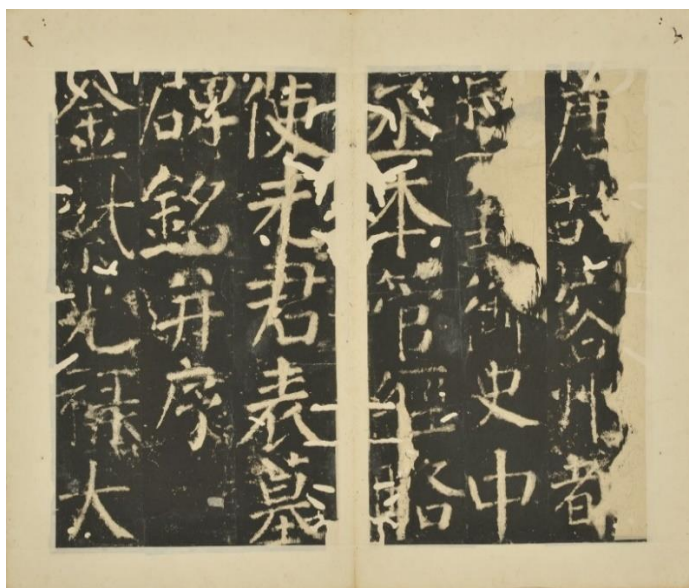
《宋璟碑》 唐時代 大暦七年（七七二）刻



唐代の名宰相・宋璟（六六三～七三七）について記した石碑です。いつしか土中に埋まってしまいましたが、明の正徳年間（一五〇六～一五二一）に掘り出され、再び世に出ることとなりました。このような過程を経たため、原石がかなり破損しており、流布している拓本も少なかつたようです。

24 顔真卿（七〇九～七八五）

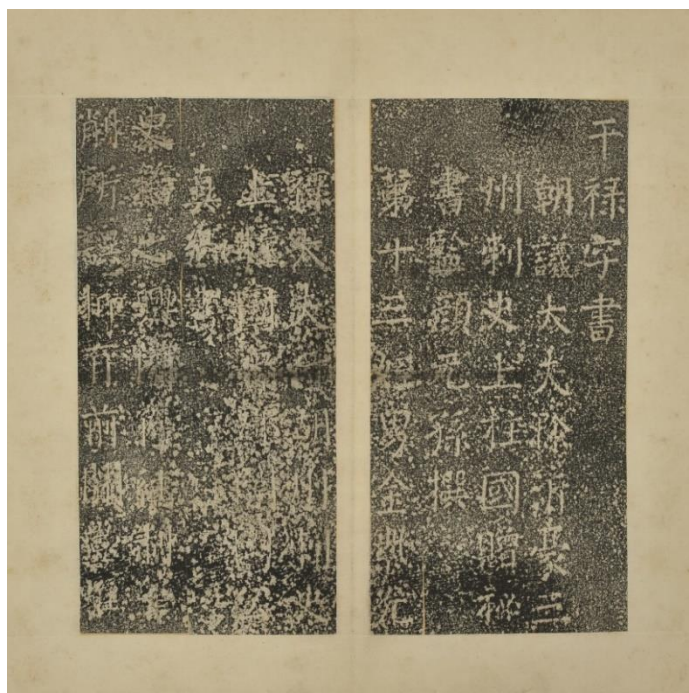
《元結碑》 唐時代 大曆七年（七七二）刻



顔真卿とともに「安史の乱」で功績をあげ、政治・文学にもすぐれた元結（七二三～七七二）の功績を述べる石碑です。《臧懷恪碑》や《宋璟碑》とよく似た書風ですが、文字の線に太いものや細いものが混在していることから、後世の人によって石碑そのものに手が加えられているとも評されます。

25 顔真卿（七〇九～七八五）

《千禄字書》 唐時代 大曆九年（七七四）刻



『千禄字書』は、漢字一字につき正字・俗字・通字の三種類を示して説明したものです。顔真卿の叔父・顔元孫（？～七三二）の著作で、顔真卿が字を書きました。「千禄」とは「禄（ろく＝給料）を千（もと）む」と読みます。官吏登用試験である科挙に応じる際の参考書として書かれたものです。

第四章

最晩年の楷書碑

―《顔勤礼碑》と《顔氏家廟碑》―

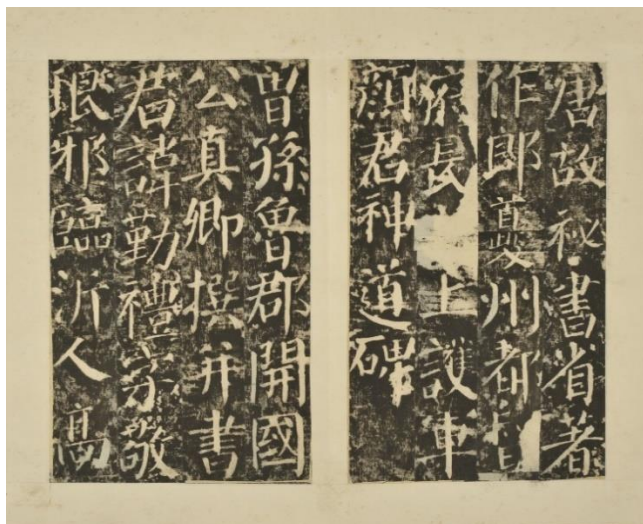
本章では、顔真卿の最晩年である七十代に制作された楷書碑《顔勤礼碑》と《顔氏家廟碑》を中心に紹介します。

《顔勤礼碑》は中華民国になってから発見された碑です。顔真卿七十一歳の作となります。《顔氏家廟碑》は顔真卿七十二歳の作品で、いずれも最晩年の書風を示すものとして扱われてきました。また、これらはともに顔真卿の一族に関わる碑であるため、かなり力を込めて制作したことも想像されます。

太く力強い線によって書かれた文字は、まるで苦難の多い人生を乗り切る顔真卿の剛直な人柄そのもののようです。

26 顔真卿（七〇九～七八五）

《顔勤礼碑》 唐時代 大暦十四年（七七九）刻
中華民国十二年（一九二三）跋



顔真卿の曾祖父である顔勤礼（五九七～六六四）と、その子孫の功績を讃えたものが《顔勤礼碑》です。顔真卿七十一歳の作品になります。顔勤礼は篆書などの古代文字に詳しかった人物と言われています。横画を細く、縦画を太くしている文字が多く、これによって《顔勤礼碑》の書風が作られています。

27 顔真卿（七〇九～七八五）

《顔勤礼碑》 唐時代 大暦十四年（七七九）刻

中華民國十二年（一九二三）跋



宋伯魯による跋文

「顔勤礼碑」は顔勤礼（五九七～六六四）と子孫の功績を讃えた文を記した碑です。中華民國十二年（一九二三）、何夢庚（字は客星・生卒年不詳）によって発見されました。このことについては、本作の末に刻されている宋伯魯（一八五四～一九三二）による跋文（下段参照）によって知ることが出来ます。

宋伯魯（一八五四～一九三二）による跋文（大意）

《顔勤礼碑》は、顔勤礼（五九七～六六四）の曾孫である顔真卿によって書かれている。中華民國十一年（一九二二）一〇月の初め、何客星が長安（現在の西安）にある役所の倉庫後方の土中より見つけた。

この碑を知る者は少なく、わずかに欧陽修（一〇〇七～一〇七二）の『集古録跋尾』に記されているのみである。「顔勤礼碑」はいつしか長安城内に埋没してしまい、千年の時が経ってしまった。

欧陽修は、「顔真卿の書は忠義心の厚い人物のようである。また、その端正で莊嚴な様を尊重するからこそ、彼の書を見た人はみな畏まり、長きにわたって愛好されている」と述べている。

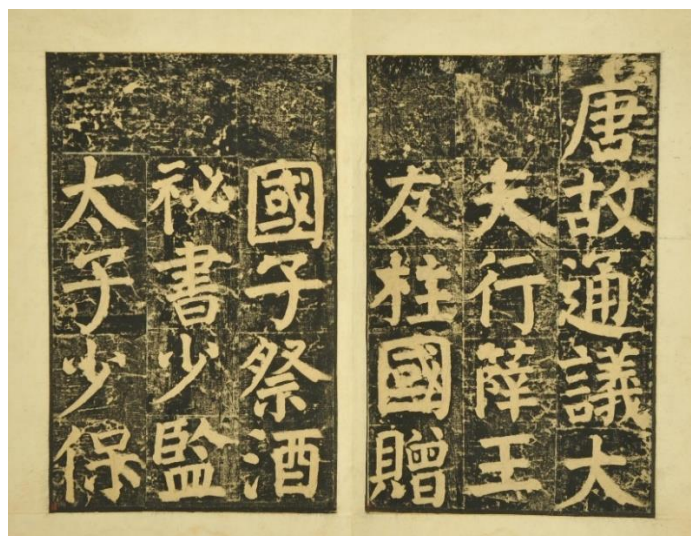
また黄庭堅（一〇四五～一一〇五）は、「顔真卿の書は際立って優れており、雅で力強さを持ったものである。後の世代における宝となるものだ」とも述べている。

何客星は、石碑や青銅器の銘文などが好きな人で、「顔勤礼碑」を手に入れて眠れないほどに喜んだ。

中華民國十二年（一九二三）の春、醴泉（現在の陝西省）の宋伯魯が記す。

28 顔真卿（七〇九～七八五）

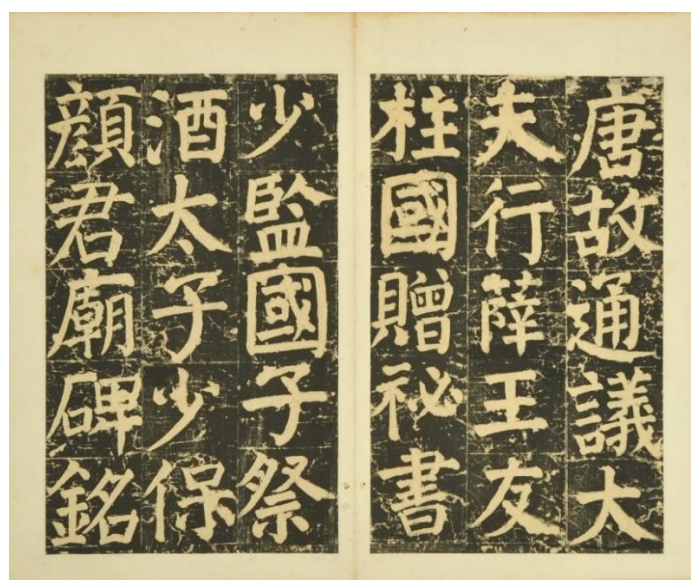
《顔氏家廟碑》 唐時代 建中元年（七八〇）刻



顔真卿の父である顔惟貞（六六九～七一二）を中心とする顔氏一族の業績を刻したものです。顔真卿七二歳の作品になります。碑は顔惟貞以前の祖先の業績・顔惟貞の業績・顔真卿ら子孫の業績という三段構成になっています。顔真卿晩年の書であり、顔氏一族の業績を詳しく伝える重要な史料でもあります。

29 顔真卿（七〇九～七八五）

《顔氏家廟碑》 唐時代 建中元年（七八〇）刻



顔真卿の父・顔惟貞（六六九～七一二）を中心とする顔氏一族の業績を刻した碑です。太い線で書かれた力強い書風は、多くの苦難を乗り越えて時代を生き抜いた顔真卿そのもののようです。顔真卿の人生において、最後に巡ってきた順境の時期に書かれた作品とも評されます。

終章

顔真卿の書に学ぶ

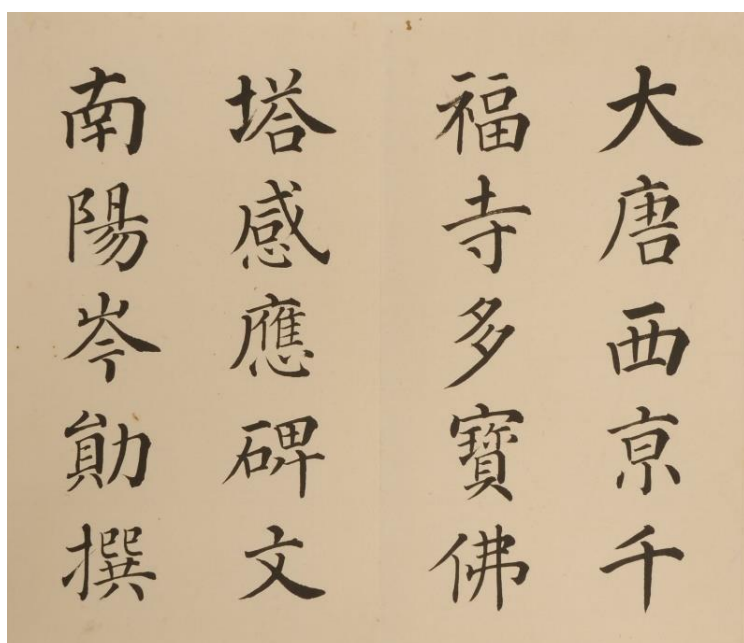
―日本人書家たちの臨書帖―

顔真卿の書は、その人柄を示すかのような素朴で力強い書風が愛好され、書法学習における手本として用いられてきました。それは中国のみならず、日本を含めた東アジア全域で行われています。

本展では最後に、観峰館の収蔵する作品から、江戸時代あるいは近代に活躍した日本人書家たちが顔真卿の書を臨書した折帖を展示します。これらの多くは、師から弟子へ、書法の技術を伝えるために書かれたものです。歴史に名を残す書家たちも、顔真卿の書に学びました。肉筆の折帖は、先達がどのように顔真卿の書を学んできたのかを、後世の我々にも伝えてくれているのです。

30 中沢雪城（一八〇八？～一八六六）

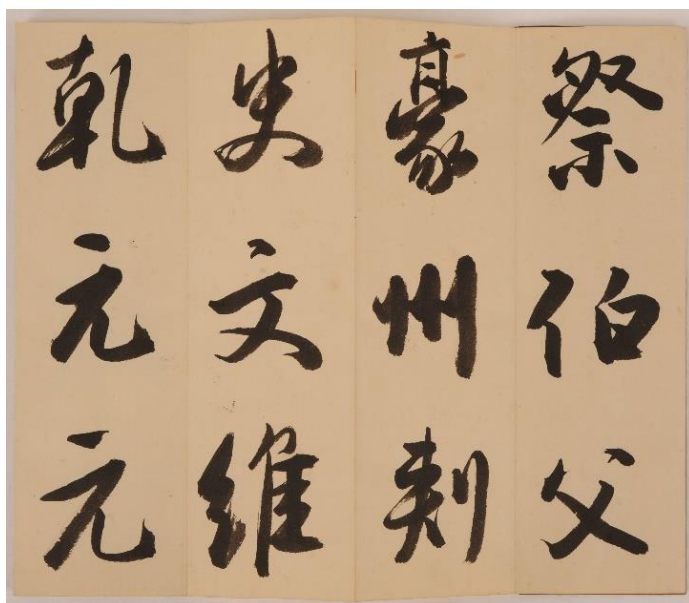
《臨書帖「多宝塔碑」》江戸時代後期 嘉永二年（一八四九）



江戸時代後期の書家・中沢雪城が顔真卿の《多宝塔碑》を臨書した作品です。軽やかに筆を運びつつ、均整の取れた形を書きこなす技量の高さが窺えます。細身でやや軽い線質は、中沢雪城の師である巻菱湖（一七七七～一八四三）の書と共通するものを感じさせます。

31 辻本史邑（一八九五～一九五七）

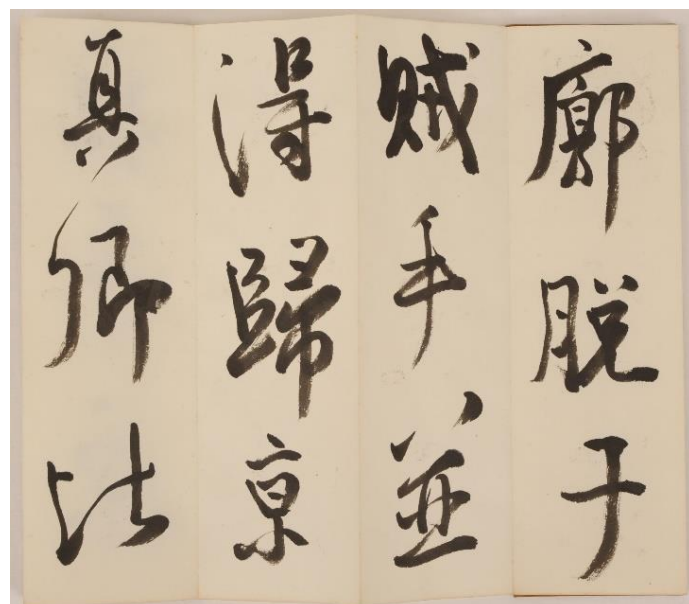
《臨書帖「祭伯父稿」》昭和時代



大正～昭和時代に活躍した書家・辻本史邑が顔真卿の《祭伯父稿》を臨書した折帖です。《祭伯父稿》は《祭伯父文稿》あるいは《祭伯父文稿》とも呼ばれ、顔真卿の伯父・顔元孫（？～七三二）および一門の物故者を祀る文章を記したもので、《祭姪文稿》《争座位文稿》と並び顔真卿の行書を代表する作品です。

32 辻本史邑（一八九五～一九五七）

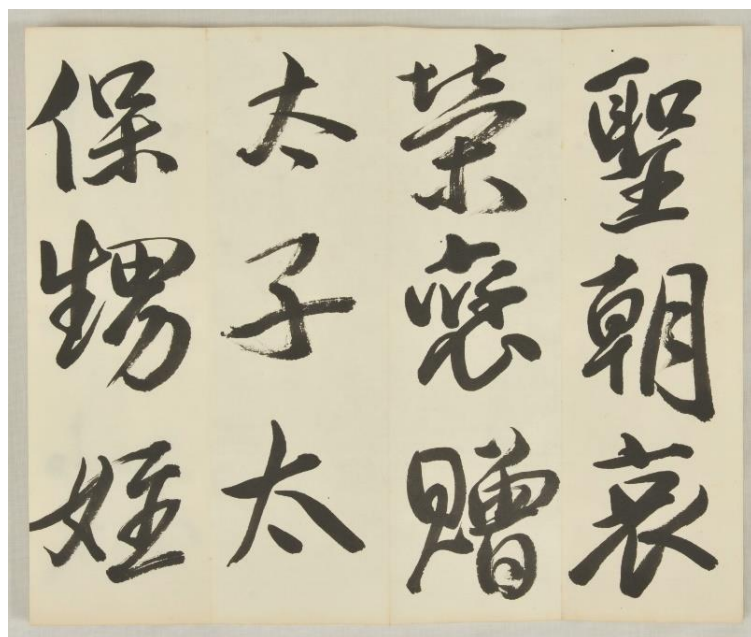
《臨書帖「祭伯父文稿」》昭和時代



大正～昭和時代に活躍した書家・辻本史邑が顔真卿の《祭伯父文稿》を臨書した折帖です。顔真卿の行書に見られる躍動感のある線質を再現している逸品です。線に表れた墨の濃淡から、史邑が緩急のある筆運びによって《祭伯父文稿》を臨書している様子を想起することが出来ます。

33 小坂奇石（一九〇一～一九九一）

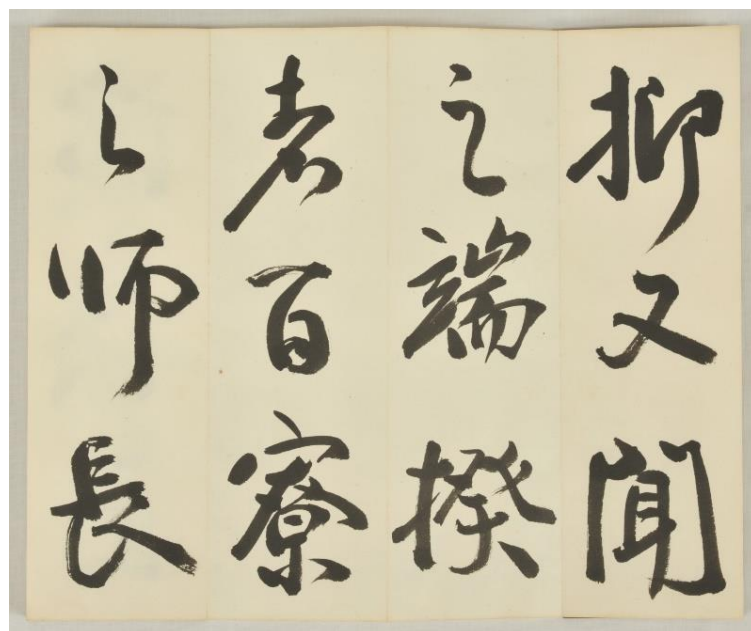
《臨書帖「祭伯文稿」》 昭和時代



昭和～平成時代に活躍した書家・小坂奇石が顔真卿の《祭伯文稿》を臨書した折帖です。力強い線質に、奇石の非凡な力量を見ることが出来ます。特にカスレの部分で力強い線を引き続ける筆運びに圧倒されます。

34 小坂奇石（一九〇一～一九九一）

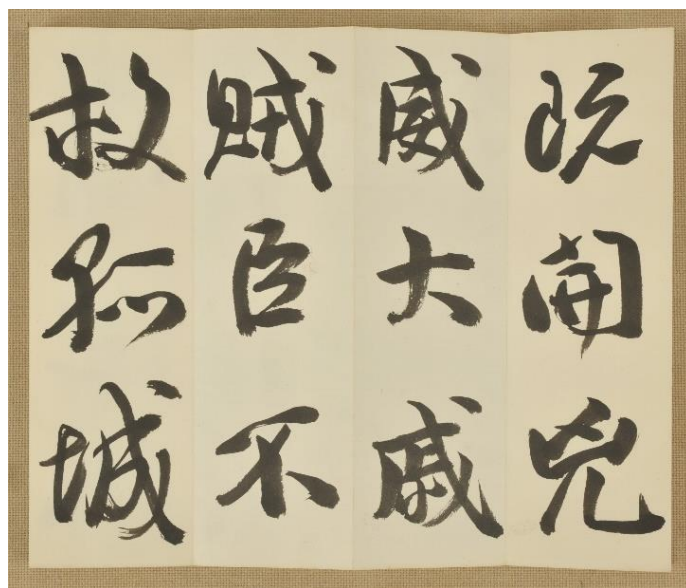
《臨書帖「争座位稿」》 昭和時代



昭和～平成に活躍した書家・小坂奇石が顔真卿の《争座位文稿》を臨書した折帖です。筆をまっすぐ立てて紙に切り込んでいくような強い筆致は、奇石の書における特質の一つです。力強い線質を追求した奇石は時に「線の行者」と評されることもありました。

35 小坂奇石（一九〇一～一九九一）

《臨書帖「祭姪稿」「祭姪帖」》昭和時代



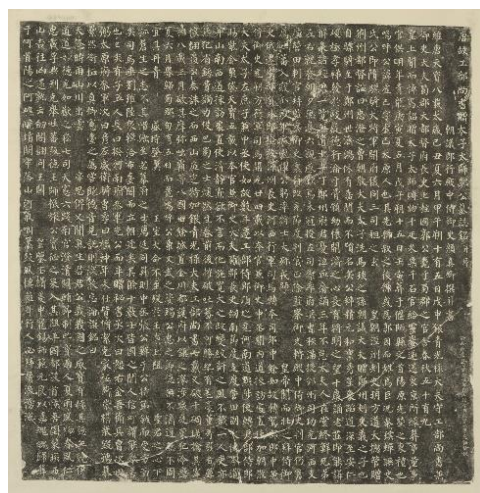
臨書帖「祭姪帖」
冒頭部分

昭和～平成時代に活躍した書家・小坂奇石が顔真卿の《祭姪文稿》を臨書した折帖です。作品名は奇石自身が書きいれた折帖の題箋に依ります。筆を突き入れるように書き出し、筆圧を弱めることなく書き進められた臨書は、顔真卿を通して奇石自身の書風を表現しているようです。

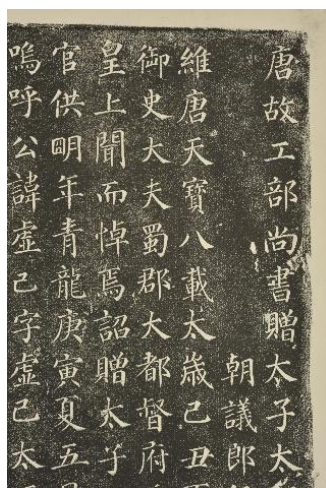
参考展示

36 顔真卿（七〇九～七八五）

《郭虚己墓誌銘》唐時代 天宝八年（七四九）刻



全図



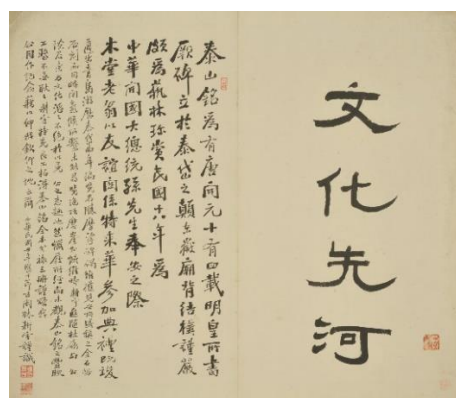
冒頭部分

《郭虚己墓誌銘》は、唐時代の官僚であった郭虚己（六九一～七四九）の姓名・経歴・没年などを記したものです。顔真卿四十一歳の書で、現存する顔真卿の作品では天宝元年（七四二）の《王琳墓誌》に次ぐ若書きとなります。細身で柔らかな線は褚遂良の《雁塔聖教序》を想起させる繊細な書風です。

37 玄宗（六八五～七六二）

《紀泰山銘》（犬養毅旧蔵本）唐時代 開元一四年（七二六）刻

中華民國二〇年（一九三二）識語



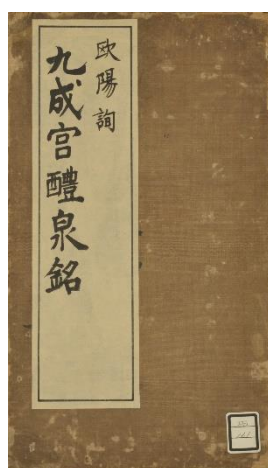
識語

《紀泰山銘》は、唐の玄宗が封禪（皇帝の即位を天と地に報告する儀式）を行った時に刻されたものです。太く力強い隸書は玄宗の代表作でもあります。

本作の冒頭には、中華民國二〇年（一九三二）に書かれた識語（作品の由来などを書いた文章）があります。これには、孫文（一八六六～一九二五）との厚誼によって、本作が犬養毅（一八五五～一九三二）の收藏品となったことが記されています。

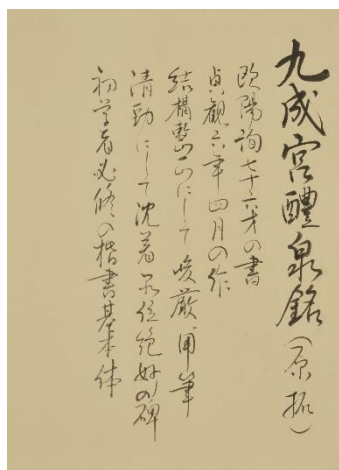
展示こぼれ話 ～観峰コレクションの題箋と解説文～

本展で展示している作品は、観峰館の運営母体である公益財団法人日本習字教育財団の創立者・原田観峰（一九一二～一九九五）が収集した「観峰コレクション」の一部です。



題箋

これらの多くに、観峰自身が題箋を書きいれています。展示番号4《九成宮醴泉銘》の題箋もその一つです。



解説文

また本作には、過去に展示した際に用いられたと思われる、観峰自筆の解説文が附属しています。書道を学ぶ人たちに自らのコレクションを活用してほしいという願いが伝わってきます。

主要参考文献

〈論文〉

- 飯島太千雄「試論——顔書の実像」『顔真卿大字典』東京美術、一九八五年
- 角井博「争坐位文稿と美の理想」『墨』第二五二号、芸術新聞社、二〇一八年
- 瀬川敬也「実施報告 観峰館春季企画展 「点は墜石のごとく」顔真卿書法とその継承者たち」の概要」『観峰館紀要』第一三号、公益財団法人日本習字教育財団観峰館、二〇一八年
- 外山軍治「顔真卿の書とその背景」『中国の書と人』創元社、一九七一年
- 外山軍治「顔真卿」『中国の書と人Ⅱ』創元社、一九八六年
- 外山軍治「顔氏家廟碑」『中国の書と人Ⅱ』創元社、一九八六年
- 中村史朗「争坐位文稿の書法」『墨』第二五二号、芸術新聞社、二〇一八年
- 宮崎洋一「顔真卿書『殷夫人顔君碑』について——顔真卿の晩年の書風に関する一考察——」『書学書道史研究』第一号、書学書道史学会、一九九一年
- 宮崎洋一「『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』——顔真卿の行書における「草稿」と「完成」——」『文教国文学』第三一号、広島文教女子大学国文学会、一九九四年
- 宮崎洋一「手本としての「顔真卿」」『広島文教人間文化』第四号、広島文教人間文化学会、二〇〇四年

宮崎洋一「顔真卿撰書「八関斎会報徳記」について——伝世石刻の享受の一例——」『文教国文学』第六〇号、広島文教女子大学国文学会、二〇一六年

宮崎洋一「明清時代の「顔真卿」——宋元時代の評価などとの比較を中心に——」『書学書道史研究』第二七号、書学書道史学会、二〇一七年

横田恭三「顔真卿 早年の楷書碑誌」『跡見学園女子大学文学部紀要』第三九号、跡見学園女子大学、二〇〇六年

吉川忠夫「顔真卿伝——時事はただ天のみぞ知る——」『法蔵館』二〇一九年

〈展覧会図録／全集等〉

『顔真卿——王羲之を越えた名筆——』東京国立博物館、二〇一九年

『中国書法全集』第二六巻、栄豊斎、一九九三年

顔真卿の書に学ぶ一館蔵法帖名品選一

会期：令和4年（2022）4月16日（土）～6月12日（日）

	テーマ	作家名（生卒年）	作品名	制作年	目録番号
1	序章 顔真卿以前 一書聖・王羲之と初唐の三大家一	王羲之（303?～361?）	蘭亭序	原本：東晋時代 永和9年（353）	拓帖－023
2		王羲之（303?～361?）	蘭亭序（定武本）	原本：東晋時代 永和9年（353）	帖－単－108
3		王羲之（303?～361?）	集王聖教序	唐時代 咸亨3年（672）刻	碑－唐－072
4		欧陽詢（557～641）	九成宮醴泉銘	唐時代 貞観6（632）刻	碑－唐－023
5		欧陽詢（557～641）	九成宮醴泉銘（秦氏本）	唐時代 貞観6（632）刻／清時代 模刻	碑－唐－029
6		欧陽詢（557～641）	蘭亭記	原本：唐時代 貞観2年（628）	碑－唐－015
7		虞世南（558～638）	孔子廟堂碑	唐時代 貞観3年（629）頃 刻	碑－唐－001
8		伝 虞世南（558～638）	昭仁碑	唐時代 貞観4年（630）頃 刻	碑－唐－017
9		褚遂良（596～658）	雁塔聖教序	唐時代 永徽3年（652）刻	碑－唐－044
10	第1章 若書きの楷書碑 一「多宝塔碑」と「東方朔画賛碑」一	顔真卿（709～785）	多宝塔碑	唐時代 天宝11年（752）刻	碑－顔－002
11		顔真卿（709～785）	多宝塔碑（模刻本）	唐時代 天宝11年（752）刻／模刻時期不詳	碑－顔－003
12		顔真卿（709～785）	多宝塔碑（和刻本）	唐時代 天宝11年（752）刻／江戸時代後期 刻	帖－単－055
13		顔真卿（709～785）	東方朔画賛碑	唐時代 天宝13年（754）刻	碑－顔－008
14		顔真卿（709～785）	東方朔画賛碑（模刻本）	唐時代 天宝13年（754）刻／模刻時期不詳	碑－顔－006
15	第2章 行書の法帖 一「争坐位文稿」を中心に一	顔真卿（709～785）	顔魯公三表真蹟	原本：唐時代 至徳2年（757）	帖－単－030
16		顔真卿（709～785）	争坐位文稿（楊峴旧蔵本）	原本：唐時代 広徳2年（764）	拓帖－027
17		顔真卿（709～785）	送劉太冲序	原本：唐時代 大暦7年（772）頃	帖－単－082
18	第3章 楷書の法帖 一顔真卿50～60代の諸作品一	顔真卿（709～785）	蔵懷恪碑	唐時代 広徳元年（763）刻	碑－顔－011
19		顔真卿（709～785）	郭氏家廟碑	唐時代 広徳2年（764）刻	碑－顔－012
20		顔真卿（709～785）	大字麻姑仙壇記	唐時代 大暦6年（771）刻	碑－顔－014
21		顔真卿（709～785）	大字麻姑仙壇記（有泰旧蔵本）	唐時代 大暦6年（771）刻／清時代 道光22年（1842）跋	帖－単－021
22		顔真卿（709～785）	八閩齋会報徳記	唐時代 大暦7年（772）刻	碑－顔－015
23		顔真卿（709～785）	宋璟碑	唐時代 大暦7年（772）刻	碑－顔－020
24		顔真卿（709～785）	元結碑	唐時代 大暦7年（772）刻	碑－顔－017
25		顔真卿（709～785）	干祿字書	唐時代 大暦9年（774）刻	碑－顔－031
26	第4章 最晩年の楷書碑 一「顔勤礼碑」と「顔氏家廟碑」一	顔真卿（709～785）	顔勤礼碑	唐時代 大暦14年（779）刻／中華民国12年（1923）跋	碑－顔－022
27		顔真卿（709～785）	顔勤礼碑	唐時代 大暦14年（779）刻／中華民国12年（1923）跋	碑－追－001
28		顔真卿（709～785）	顔氏家廟碑	唐時代 建中元年（780）刻	碑－顔－026
29		顔真卿（709～785）	顔氏家廟碑	唐時代 建中元年（780）刻	碑－顔－029
30	終章 顔真卿の書に学ぶ 一日本人書家たちの臨書帖一	中沢雪城（1808?～1866）	臨書帖「多宝塔碑」	江戸時代後期 嘉永2年（1849）	書冊－B－011
31		辻本史邑（1895～1957）	臨書帖「祭伯父稿」	昭和時代	辻－018
32		辻本史邑（1895～1957）	臨書帖「祭伯文稿」	昭和時代	辻－020
33		小坂奇石（1901～1991）	臨書帖「祭伯文稿」	昭和時代	小坂－004
34		小坂奇石（1901～1991）	臨書帖「争座位稿」	昭和時代	小坂－002
35		小坂奇石（1901～1991）	臨書帖「祭姪稿」「祭姪帖」	昭和時代	小坂－005
36	参考展示	顔真卿（709～785）	郭虚己墓誌銘	唐時代 天宝8年（749）刻	拓整－0059
37		玄宗（685～762）	紀泰山銘（犬養毅旧蔵本）	唐時代 開元14年（726）刻／中華民国20年（1931）識語	碑－大－002